保育をつなぐ

～ お茶の水女子大学附属幼稚園からの発信 ～

Vol.9

附属幼稚園と大学 ― 研究・教育のパートナーとして ―

小玉亮子

「保育をつなぐ ～お茶の水女子大学附属幼稚園からの発信～」は3年目を迎えます。本シリーズでは、附属幼稚園の3歳児、4歳児の担任、養護教諭、全体フリー、あるいは事務職員、さまざまな立場の職員が、そして学内保育施設の保育士さんがバトンをつないできました。第9回は、附属学校園とのかかわりが深い大学教員が、附属幼稚園と大学の関係について綴ります。

＊

共同で研究すること

東京都文京区にあるお茶の水女子大学（以下、お茶大）キャンパスの中には、大学だけではなく、附属幼稚園、附属小学校、附属中学校、附属高校、いずみナーサリー、文京区立お茶の水女子大学こども園の6学校園があります。お茶大では、ここ10年ほど、異なる学校種が相互に連携して、研究・教育を進めていこうという動きが積極的になってきてい

小玉亮子（こだま りょうこ）
お茶の水女子大学教授。

ると感じています。

もちろん、お茶大の附属学校園の共同研究の歴史は古いです。何しろ１４０年を超える歴史をもつ大学なので、附属の歴史自体も古いですから、当然です。そこまでさかのぼらなくても、最近の共同研究としては、１９８０年代すでに当時の文部省の研究開発指定校として行った研究が、幼小連携の先駆けとなる研究として注目されると思います。その他、やはり幼小連携として有名な研究は、２００１年から3年間行った幼小連携の研究、また、２００５年からの3年間の幼小中の共同研究は大変意義ある研究となりました。これらの研究を通して、「滑らかな接続と適切な段差」という言葉が紡ぎ出され、幼小連携ではなく、幼小接続という言葉で議論されたことは極めて重要だったと思います。お茶大が提案したこの理念が、その後の日本中の「幼小接続」研究の嚆矢となったことは言うまでもありません。

こういった共同研究の場に大学が参加できたことは、大学にとって大変幸運なことだったと思います。私が参加したのは、２０１０年から6年間実施された連携研究ですが、そこでは、文字通り、大学と附属学校園全体を巻き込んだ共同研究が推進されました。私はこの時から共同研究に参加したのですが、幼稚園と小学校と大学が共同研究者であることを意識するようになったことは私にとって大変貴重な経験となりました。当初の私は、幼稚園と小学校の共同研究の伴走をするのが大学だというような意識だったかと思います。ところが、附属の先生方から、そんなことでは困ると、はっきりと私の姿勢を問うご意見を頂きました。私が実践の研究者ではないということもあって、少し腰が引けていたのかもしれません。あるいは、自分ではできないのに人の実践を論評して自分の研究成果にする

ようなことはしたくない、という教育学者を自称する私の「教育学者批判」ともいうようなこだわりがあったのかもしれません。

パートナーという言葉

とはいえ、共同研究に参加する中で、附属の先生方の率直な議論を聞きながら、少しずつですが、私は私のとるべきスタンスのようなものを模索するようになりました。そのうち、私が少し落ち着いて共同研究にかかわれるスタンスを指す言葉として、パートナーという言葉を見つけることになりました。「パートナー」は、夫婦や、婚姻関係にないカップルのことを指す言葉として使われることが多い言葉です。しかし、欧米では、このパートナーという言葉が、教師と親の関係のあり方を議論する上でキー概念となっているのです（詳しくは、小玉編『幼小接続期の家族・園・学校』をご覧ください）。パートナーと言うときには、どちらかがもう一方を指導するという発想はありません。むしろ、共に主体として、互いに対等に相談しながら物事を進めるときに使う言葉です。今では、企業と企業が共同して事業をするときにもしばしば使われているように思います。

そして、何より、私がこの言葉に魅かれたのは、パートナーという言葉が、相互に相手をリスペクトして初めて成り立つ関係に他ならないというところです。それぞれの附属学校園が相互に、そして大学もまた、共同研究のパートナーなのだと思うようになるにつれ、附属の先生方の共同研究の場に参加することの居心地の悪さが消え、むしろ、共同研究を進めることが楽しくなっていきました。そうすると私の中のこだわりも少しずつ消えてい

▲小玉亮子編著『幼小接続期の家族・園・学校』東洋館出版社　2017年

き、腰の引けていた私も先生方の議論について、私なりに参加していろいろと考えを巡らすことができるようになりました。と、殊勝なことを書いてきましたが、小玉先生は最初からいろいろ好き勝手を言っていたではないですか、という声も聞こえてきそうです。

ツリーではなく、リゾーム

パートナーという言葉には、二者関係を指す言葉というようなイメージもあります。親と教師がパートナーだというときに、一人の先生と一人の親の閉鎖的な二者関係も思い浮かびます。しかし、教育の場を考えるとき、二者関係だけを想定しては、十分ではないと思います。むしろ、教師と教師といった同僚関係や、親同士の相互関係、さらには教師以外の学校にいる大人たち、地域の大人たち、そういった複数の人々がかかわりあって、教育が営まれていると思います。さらに、共同研究におけるパートナーという言葉を考えるとき、教育にかかわる大人たちだけではなく、むしろ、探究している子どもたちこそ、研究のパートナーであるとも言えると考えるようになりました。そう考えていくと、子どもも教師も親も、学校にいる大人たち、地域にいる大人たち、そういった人々が全部、共同研究のパートナーと呼べると思うようになってきました。

でもそう考えると、パートナーという言葉が何を指す言葉なのか、もはや何が何だか、ごちゃごちゃで訳がわからなくなってしまうなあ、と思ったりしておりました。そんなことを考える中で、出会ったのが、「リゾーム(rhizome)」という言葉です。これは、イタリアのレッジョ・エミリア市の幼児学校と、そこにインスパイアされた世界の幼児学校について学ぶ中で、キーワードとして学んだ言葉です。ごちゃごちゃだけどつながっている。

そしてそこで、何かが起こっている。そういった状況を語る言葉として、リゾームという言葉がとてもぴったりくるのです。

フランスの哲学者ドゥルーズによれば、リゾームはツリー（tree：樹木）と対比されます。樹木は、根を張って幹から枝葉が伸びていきます。中心があってそこから枝葉が派生していく、図で示すとしたら系統樹のイメージです。それに対して、リゾームは、水平に広がる根と茎のこと（地下茎）で、中心もなく、多方面に絡まって伸びて、別の何かにつながっていくようなイメージです。

私がドゥルーズのリゾームという言葉から学んだのは、私たちが進めている共同研究は、どこかに特権的な中心があって指令が出る、というような形式で何かが見えてくるような研究では決してないということでした。しかも、面白いことにリゾームは、つながりを語るのと同時に、切断も重要な意味をもつ、ということがわかってきました。今、「絆」とか「連携」とか、つながることに価値を置く議論が盛んにされる時代になっているようにも思いますが、リゾームの概念には、つながることと同時に、切れることがもつ意味が重視されていることもわかってきました。

異なるものが、つながりつつ切れる、切れつつつながる

幼稚園という場に大学教員は異質なものです。でも、リゾームという概念を踏まえれば、異なるものがつながったり切れたりしながら、何かが生まれていく、というアイデアも浮かびます。附属学校園が行ってきた共同研究から「滑らかな接続と適切な段差」という名フレーズが生まれたのも、幼稚園と小学校という異質なものの出会いがあったからではないでしょうか。

２０１８年のことになりますが、附属幼稚

園の先生たちと一緒に、ロンドンの幼児学校の視察に行く機会がありました。ロンドン大学と共同研究をしている、シェリンガム幼児学校に行ったのですが、同じものを見ているのに、附属幼稚園の先生と私が見ているものが違っていることがとても面白くて、学ぶことが多かったのです。この時、まずシェリンガム幼児学校の校長先生からロンドン大学との共同研究の話を聞き、別の日にロンドン大学の先生から幼児学校との共同研究の話をお聞きしたのですが、それぞれをファーストネームで語る話の中に（日本と異なるイギリスの風習だからですが）、それぞれのポジションの違いの自覚と、そこに指導－被指導の関係が全くないことに、いよいよ私の考えは確信となっていきました。

幼稚園の先生と大学教員の私は、異質なものであると言えると思います。異質なもの同士の出会いに生まれるものがあれば、それはとてもうれしいことではないか、と思っています。そもそも、考えてみれば、先生たちだって、一人ひとり、異なります。異なる人々がつながったり切れたりしながら、何かが生じてくる。まさに、子どもたちの世界も同様ではないか、と思っています。

現在、私は、附属幼稚園の研究開発の運営指導委員という役割を頂いています。口に出して言っていませんが、内心、この委員名はなんとかならないものか、と再び居心地の悪さを感じています。でも、自分の中で、勝手に運営パートナー委員という言葉に置き換えて、何はともあれ、幼稚園の研究に参加して、いえ、幼稚園と大学の共同研究に参加して、これまで進めてきた保育とつながる研究を一層深めたいと思っているところです。

▲シェリンガムの幼児学校で。